追悼文

故 野尻陽一理事の御業績をたたえる

池 田 尚 治*

本協会理事，鹿島建設株式会社副社長野尻陽一氏は，平成 9 年 3 月 29 日，永遠の国へと旅立たれた。本協会理事会のメンバーとして，また，大学時代の同級生として，あるいは種々の社会的な活動を通じての同氏の卓越した人間性と能力，それと暖かい友情に甘えていた筆者にとって同氏の御逝去は信じられない衝撃であった。この悲しみを表す言葉も思いつかず，ただ惜別の情と過去の楽しく語らった日々や多くのお世話になったことに対する感謝の気持ちが交叉し，三十五日の法要のときに頂戴した御写真に向かっているところである。池袋の病院にお見舞いに行ったときにはお元気な雰囲気で本協会やFIPの将来などについてお考えを伺うことができたし，また，本協会誌「プレストレストコンクリート」の昨年の11・12月号の巻頭言には我が国の建設技術の将来について　ISO 14000の導入と関連させて大変に貴重な提言をいただいたばかりである。

同氏は十年以上も前から体調を気にされるようになり，一病息災あるいは二病息災と冗談を言われながら人一倍の元気さで大活躍をされていたのであったが，阪神大震災の復旧事業に忙殺されているうちに体調を崩されついに帰らぬ存在となられたのである。現在の我が国の状況は極めて多難であって将来の方向が不透明であると言われており，このような時に同氏の卓見を伺うことができないことになったのである。同氏を失ったことは誠に悲しいことであるが，同氏の果たされた御業績をたたえることでこの悲しみを乗り越えることも必要と思われる。

同氏は昭和 35 年に東京大学工学部土木工学科を卒業され，ただちに鹿島建設株式会社に入社された。同社では技術開発や研究分野に長く携われ，海水淡水化技術の確立やマスコンクリートの施工法の解明を行い多大の貢献をされた。

海水淡水化の御研究では東京大学より工学博士の学位を授与されている。LNG地下タンクの建設に関連した研究では共同研究システムを組織され，その成果として昭和 61 年に等分布荷重下における鉄筋コンクリート梁のせん断強度に関する実験的研究で土木学会賞（吉田賞）を受賞された。また，平成元年には人工軟岩の開発と実用化で土木学会の技術開発賞を受賞された。

同氏は鹿島建設株式会社の取締役技術研究所副所長，同所長，常務取締役，専務取締役および，平成 8 年には副社長に就任され，社業を通じて土木事業の発展に著しく貢献されたが，同時に土木学会，日本コンクリート工学協会，および本プレストレストコンクリート技術協会の理事等の役割を果たされ，学協会の発展に真剣に取り組まれて大きな成果をあげられた。また，アメリカコンクリート学会（ACI）や国際プレストレストコンクリート連合(FIP)の活動にも参画され，しばしば基調講演を行って国際的に

貢献された。1990年のハンブルグにおけるFIP大会では我が国のコンクリート技術の最先端を紹介され同氏の国際的評価が一段と高まったことが想いだされる。同氏は米国の大学との共同研究システムを企画実施したり，FIPの技術委員会の委員を務められ，しばしば外国に出張されていた。一方，国内では大学教育にも参画され，名古屋工業大学の客員教授や宇都宮大学の非常勤講師も務められた。以上のほか工業技術院のJIS制定や科学技術庁の技術士試験，文部省の科学研究費補助金の審査等々，同氏の果たされた御活躍は驚くばかりである。

同氏は発注者，受注者，民間人，大学教官，等の固有の立場にこだわることなく土木技術者としての本筋に向かって真摯に議論を進めてこられ，各界から絶大なる敬意を表されている。

三十五日の法要のあと，同級生数名としばし同氏のことについて話し合ったが，結論として，同氏が果たしてこられた学協会と実務家との連繋のリーダーシップに関しては同氏以外の人ではほとんど困難であろうということであった。

同氏とプレストレストコンクリートとの関係は同氏が就職してすぐの天草五橋のPC橋の検討業務に始まり，浜名大橋などの鹿島建設の施工するPC橋に関して，直接あるいは間接に担当されてきた。筆者が同氏に案内されて訪れた施工中の橋梁では小本川橋梁，浜名大橋，別府明ばん橋，本四瀬戸大橋，呼子大橋，十勝大橋，青森ベイブリッジ，および新素材を使ったバーディ橋などがある。

同氏は学生時代は水泳部に属し，またゴルフが得意なスポーツマンであり，ゴルフにご一緒させていただいた日々がなつかしく思い出される。学生時代には東大のプールで水泳の手ほどきを受けたこともある。海外出張での楽しかった語らい等々，思い出はつきない。

同氏と再会できないことは何よりの痛手であるが，我々の心の中の同氏と語り合いながら，今後の仕事を進めていくこととしたい。また，同氏の残された著書や論文は今後大いに読みつがれ，永く活躍するはずである。

野尻陽一君，君の大きな御業績をたたえ，また，多くの御指導に感謝し，秀覺院誠道陽和居士としての御冥福を謹んでお祈りする。

(* 横浜国立大学教授・本協会理事)